
クラウン・タイム！

晴野有希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラウン・タイム！

【Nコード】

N8668X

【作者名】

晴野有希

【あらすじ】

世界中で中高生にしか発見されず、しかも二桁しか見つからない特殊な血液型「TOR (Type Of Rookie)」通称R型。

その血液型を持つ少年「村雨明日香」。

またR型の人間しか動かすことのできない兵器「TORNADO」。これはその超絶技術「トルネード」を扱う学園TND学園に入学することになった村雨明日香とその周りで起きる数多くの出来事を綴った物語。

* 縦読みをおすすめします。

離魂 プロローグ「闇を殺して」

プロローグ「闇を殺して」

一人の少年が自分の部屋で誰かを待っていた。

その少年の年は三歳から四歳程。

少年は終始笑顔で待っていた。

机にはケーキとオレンジジュースが二つずつ並んでいる。

「もういいよ！」

少年がそう言うのと暫くして一人の女の子がその部屋に入ってきた。

少年は嬉しそうに女の子に駆け寄った。

その瞬間、

グシャ

鋭利な物が何かに刺さったような鈍い音がした。

少年の目が見開かれる。

女の子の手には日本刀の柄が握られていた。

その刃は少年の腹を貫いている。

「あつ……………くつ……………」

少年はその場に倒れこんだ。

女の子はその場に立ち尽くしたまま、

「ゴメンなさい」

と震えながら呟くだけ。

それから涙を堪えるように手を握り締め、

「……………」

何も言わずにその部屋を後にした。

ドアを閉めた途端その部屋の電気がすべて消え、闇が生まれる。

その闇の中に突然『人の気配』が生まれた。

背の高い男、紳士風の男、着物を着た女性。

四、五人の人々が口々に呟いた。
「ほら、やつぱり」

それから人の気配は消えた。
無の空間。

少年は静かに立ちあがった。

IS(sirasu)×クラウン・タイム！(晴野有希)

Christmas

今回はsirasu様とコラボさせていただきました。

短い期間でしたが面白かったです。

では、どうぞ。

十二月二十四日、終業式から三日経ったこの日。

俺は自宅をクリスマスパーティー仕立てにしていた。

茉莉がどうしても言うてきかなかったのでやることになったのだが、仕事配分が今のところ

・ツリーの飾り付け 俺。

・部屋の飾り付け 俺。

・買いだし 俺。

・料理全般 俺。

っておい。さすがにこれは無理だなと速いうちから単独戦を諦め、現を電話で呼んだ。もう少ししたら来るだろう。

「さて、と」

俺は焼いたターキーを保温容器に入れ、一休みしようとしていると、

ケータイのメール受信音が鳴った。

少し前に檸檬こと明星レモンがアニメの主題歌を担当した時の歌が今の俺のメール受信音だ。ちなみに電話はワダバ。

ケータイを開けて送信主を確認 俺はケータイを閉じた。

そこに浮かんでいた名前は『メアリー博士』。タイミング的に嫌な予感しかない。見たくない。

とは言っても本当に見ないわけにはいかないので早々に現実逃避を止め再びケータイを開いた。

件名「明日香君にお・」

えっ? 「お・」ってなんだ?

内容「ね・が・い! ここに逝って」

どう操作すれば件名と内容をこんなことに出来るのだろうか。

矢印の下には地図データが添付されており……………

って「いく」が「行く」じゃなくて「逝く」になってる！？ もしかして死ぬ危険があるの！？

不穏すぎるメールに対し俺は一言。

件名「博士へ」

内容「丁重にお断りいたします」

送信！

三秒後

はやっ！？

件名「だつたら・・・」

内容「明日香君は一生私の奴隷！」

「奴隷！？ そここまでされなきゃなの！？ っていうか三秒でどうやってこの文章書いたんだ！？ 指速っ！？」

速攻変身・・・いやいや返信。やばい。焦りすぎてテンションが狂つてる。

件名「・・・」

内容「分かりました」

送られてきたデータをブラウザー・ヴィントUWに取り込み、自動操縦で行くことにする。できれば逝きたくない。

俺が発済するためTND学園に行（トルネードは『基本』TND学園外での展開は禁止だ。『基本』だからドラゴンや魔法使いが現れた時は例外だ。というかそう信じたい）こうしていると、

「あっ」

「・・・えっ？」

玄関で現と出くわした。

「・・・何処か行くの？」

不安げな顔で見つめてくる現。眼鏡＋その顔は卑怯だと思った。

「ちょっとメアリー博士に頼まれてな。どういう用件かはまだよく分からないんだが。だから現、俺が帰ってくるまでここに残って

」

「・・・」

（抗議＋批難＋不安＋拒否）×眼鏡×上目使い＝所謂玩具を強請る

子供のような愛くるしく何とも言えないあの感じ。

「
と思ったが一緒に行くか？」

「うん」

とても嬉しそうな笑顔を浮かべ現は即答した。

俺、娘が出来たら甘やかすタイプの父親になりそうだな……。

心中穏やかではなかったが、俺と現はTND学園へと向かった。

TND学園。

「やあやあ明日香君！　そして現ちゃん！　うん、このカップリングも中々……お姉さん困っちゃうよ……」

到着して早々博士と出くわしたのは良かったが安心と安全のメアリー品質。変わらぬメアリー節だ。

そして何故か現は頬を朱に染めている。そして博士は思案顔。なんだこれ？

「ところでどうして俺を？」

「あ……明日香君にね、行ってほしい所があるんだ！」

博士は思案顔を止め俺の前でパタパタ動きながら話す。

「それは地図を見れば分かりますが……」

「うん！　じゃあ、行ってらっしゃい！　現ちゃんも行くんだよね？」

この様子だと真相を言う気は無いらしい。昔から悪戯好きな博士がまた何か仕掛けたのかもしれない。はまってあげますかドッキリに。

「じゃあ、行くか現」

「………うん」

俺達は学園の屋上に行きトルネードを展開。あとは自動的に地図の示す所まで飛んでくれる。

屋上に蒼と紫の機体。現の専用機【パープル・レイン】には既にデータは転送済み。

俺達は徐々に浮上し、勢いよく目的地へ向け発進した。

「カオスだ……………」

「……………カオス」

カオスとは混沌である。そして俺の目の前に繰り広げられている情景、それこそが混沌の一言につきた。

状況説明の前に備考として少し。

【フェニックスSS】

日本国軍所持の戦闘機。海、空両

用戦闘機で海でもほとんど抵抗を感じず移動することが出来る。装備は両翼付け根のレーザー砲と内蔵されている海、空両用ミサイル。

【M・ラビット】

海軍所持の小型偵察船。潜水も出来る

優れたもの。武器は搭載された散弾レーザー。機動力が重視された当に三月兔（狂った兔）だ。

と、俺が何故こんな説明をしたのか。

それはこの日本軍が所有する最新鋭戦闘機と戦船が鉄屑となって海の上に浮かんでいたからだ。

惨劇。そんな言葉がびつたりな光景だ。そして犯人は分かっていた。なにせ性懲りも無く『宙に浮いていた』からだ。

トルネードよりメカメカしい装甲で覆われた人間（顔が出ていてそれがまさに人間だ）が四人宙に浮いている。

一人は白い装甲。外見は男。

一人は黒い装甲。外見は男。

一人は紅い装甲。外見は女。

一人は黒い装甲。外見は女。

だが、これは俺が修行不足だからだろうか、彼らから敵意や戦意が感じられない。

そんなことを考えているとその四人と完全に目が合った。

これが所謂『未知との遭遇』というやつなのか。第一声はどうしたものだろう。

俺は考えた末、本当にどうしようもないくらい普通の問いを投げ

かけた。

「お前達……何者だ？」

その問いに四人は安心したような、それでも煮え切れない感じの渋い顔をして口を開く。

「やつと話せるやつが来た」

「死に掛けたぞ？ 普通に……」

「しかしここは一体どこなのだ？」

「どこからどうみても地球でしょうが……たく、どうなってるのよ」
求めていた解答とは多少ズレが、というか決して解答は無かったが情報はもらえた。

とりあえず地球語、いや日本語を話している。よく見ると男二人は日本人顔、紅い機体の女はたぶん中国人、もう一人はコーカソイドのようなのでヨーロッパの方だろうか？

とは言っても考えてみればアリスやリリパットも日本語を話すのだからそれだけじゃ地球人の証明にはなっていない。

「念のため交信を試みるが、お前たちは何処の星の人間だ？」

俺の問いに四人は多少嫌そうな顔をする。

「いや、地球人なんですけど……」

「待て、宙。ISを相手は装備していないぞ！？」

「そつえば……男だな」

「男ね」

白い機体の男と紅い機体の女が『男』に食いついた。ちなみに現は後ろの方にいるので接触しているとは言えない状況だ。

「そんなに俺がめずらしいのか？」

「お前たち、注目するところはそこじゃない。ISを使ってるのに空を飛んでいるのだぞ？」

「確かに……他の国の新兵器か？」

「そんな情報知らないわよ」

「鈴モラウラも知らないのか、じゃあ、あれは一体？」

「まあ、とにかくにも……こちらに戦闘の意思はない」

とりあえず分かったのはこの人たちは人の話しを聞かないということとだけだ。そしていつの間にか話が変わっている。『IS』なるワードが目立つがこちらから言わせればISなんて知らない。そしてどうも男の一人の名前は『宙』、女性がそれぞれ『鈴』と『ラウラ』。そして皆地球人（自称）。

「ひとついいか？」

「ああ」

今度はちゃんと返事をしてくれた。ってこれが普通だよな？

「本当に地球人なのか？」

「ちゃんと日本語はなせているだろうが・・・ドイツ語だって、中国語だって話せるぞ？」

「ほう」

素直に感心してみた。ちなみに俺は、ドイツ語は多少分かる。中国語も住んでいたから会話程度なら。

「ラウラと鈴がな・・・」

「宙はドイツ語も中国語も話せるのか・・・さすが、わが夫」
「え？」

「どうだ？　これが一夏と夫の差だ」

「いや、ラウラ？　俺は話せないと・・・」

「ふん！　一夏だって話せるわよ。ねっ？」

「だから、ラウラ？　話せないと・・・」

「いや、俺は話せないぞ中国語」「俺も話せない」

「それぐらい話してみせなさいよ！　帰ったらしっかりと教育・・・ブツブツ」

「俺の話を聞けーーーーー！！！」

「あのーーーー　って聞いてない？」

とりあえず文脈的に鈴という女性が中国人、ラウラという女性がドイツ人、そしてもう一人の男の名前は『一夏』。そして宙はラウラの夫。同じ年くらいに見えるのに結婚しているのか。そして何気に地球人かどうか未だに分からない。

「で？ お前たちは何をしているんだ？」

「クリスマスパーティーをしていただけなんだ。それ以外にすることなどない！」

「一夏…お前……」

「尋問されているというのに・・・馬鹿か？」

弁明すれば尋問はしていない。そして尋問だと思っのなら何故さつきから名前や出身を漏らしているのか。

「馬鹿よ、馬鹿」

「馬鹿って何だよ、鈴。パーティーをしていただけじゃないか」

「あの人が変なことをしなければなく、ホント」

「パーティーをしていただけだな」

「私は軍人だ。尋問などに屈しない」

弁明すれ以下略。

「私も軍人だから、しゃべる気ないわ」

「なんなんだ一体・・・？」

とりあえず女性二人は軍人であるという新情報。

「ふう、とにかくここは・・・かくまってくれとうれしい」

「だな、軍隊に追いかけられるのはこりごりだ」

「せっかくのクリスマスに、まったく」

「ほんと、ここからだったんだが・・・宙、マフラーは落としてないだろうな」

言葉も出ないとはこのことだろうか？ としみじみ感じた今日のこの頃。そして四人が四人ともクリスマスパーティーに未練ないし何かしらあるらしい。

「落とすかよ、せっかくのプレゼントだぞ？」

「ふ、ふん。それでいい」

嬉しそうに頬を赤らめるラウラ（たぶん）という女性。人間性は有るようだ。

「でも、これからどうする？」

「あ、あんたが言ってるじゃないわよ！ あんたがああ箱を開けな

ければ良かったことじゃない!!」

「はあ、俺の責任か？ 別にどうでも良い、とか何とかお前が言ったじゃないか」

「なんで巻き込むのよ!!」

これでは埒があかないと思った俺はとりあえずこれが『メアリー博士の悪戯』だと考え、

「ちよつとストップ！ とりあえず俺の家に来るか？ クリスマスパーティーの準備中なんだが」

と誘うはめになっていた。

「で、結局・・・こうなったわけか」

現在地、俺の家。総員六名。俺、現、宙君、ラウラさん、一夏君、鈴さん。

「おお、すげえなこれは」

「二次会になるのか？」

「でも、なかなか楽しめそうね、これ」

これ、扱いかよ・・・

「こちらにもクリスマスあるんだな」

「それは一応、俺たちのセリフなんだがな」

するとガチャンと勢いよく玄関のドアが開く音がしてマシンガンが如し足音を鳴らしながらリビングの扉をバンと開け放ったのは、

「美和」

「お兄ちゃん！」

そう叫ぶと美和は俺にダイブ。俺はそれを受け止める。

「お兄ちゃん！ パーティー楽しみ！」

「分かったから、美和。ほらちゃんとお客さんに挨拶して」

明らかに周りが見えていない美和にそう促すと美和はその見たことのないお客さんに対し頭を下げる。

「はじめまして。村雨美和です。兄がお世話になっております」
何時になく律儀かつ丁寧だった。

「妹か？」

「そうだが」

「ふーん、デジャブだ」

この状況にデジャブ！？ それはもう同士しかあり得ない気がする。

「お前も苦勞してるんだな……」

「お前もか……」

俺と宙さんはいつの間にか抱き合っていた。変な意味は無い。しかしそこには尊大な意味が有る。

男同士でそんなことをしているうちに茉莉、メリールが家に入ってきていて「なに、これ？」と動揺していた。

とりあえず事情を説明し、納得してもらい、改めて皆でクリスマスパーティーを開くことになった。

？

明日香宅のクリスマスパーティーはイレギュラーを含め行われることになった。

「なんかあつちで抱き合ってるぞー」

明日香は妹というキーワードにおいて共感の持てた宙と抱き合っている。それを美和が引き離しにかかっていた。

「一夏、あんたも混ざってくれば？」

「え？」

「てか、今からガールズトークするんだから気を利かせなさいよ」

「……了解」

明日香とはまた違う苦勞を抱えていそうな一夏は不貞腐れつつも明日香や宙がいる方へと向かった。

リビングに女性陣が集まっていた。

恋する乙女の結託は時にどんな絆より強い、それを体現するように初めて会った鈴音とラウラを含めてメリール、茉莉、現は打ち解

けあっていた。現は多少人見知りの気があるがメリールや茉莉のおかげで面と向かって話せるほどになっている。

そしてそこに流れる空気は少し甘美で蠱惑的な雰囲気だ。そう、それは所謂『ガールズトーク』の雰囲気だった。当然その議題は恋話。

「じゃあ、早速！」

茉莉が皆に促すように威勢よく声を上げる。

「とりあえず見て取れる感じでは鈴音は織斑君、ラウラは宙君が好きなわけよね」

ついさっきまでメリール達はそれぞれを『鳳さん』『ボーデヴィツヒさん』と呼んでいたが「名前がいい」という二人の意見を尊重し今はもう名前で呼んでいる。ちなみに鈴音は普段『鈴』と皆から呼ばれているので多少むず痒い感じがしていたがさすがにそれは速いというメリール達の意見に譲歩した。

「なっ!？　べ、別にあたしは幼馴染ってだけで・・・」

「うむ。宙は私の夫だからな」

両者の反応に茉莉はそれぞれ違う意味で「アハハ」と乾いた笑いを洩らす。

「こんな機会そう無いんだからさ。正直に言っちゃいなよ」

茉莉が鈴音に向かって意地悪な笑みを贈った。それに対し鈴音は頬を朱に染めながら、

「う・・・・・・」

と黙り込みながら小さく首肯。その場の女性陣にはそれで十分だった。

「あ、あ、あんた達はどんなのよ！　やっぱりあの明日香っていうのが好きなわけ？」

復活した鈴音がメリール、茉莉、現をいっぺんに見つめながら捲くし立てた。

「はっ!？　いや、私は別に・・・いや、えっと・・・」
人のことを言えないメリールだった。

「わっ、私はず、好きだよ……明日香が」

誰もが「なにこの可愛いの」と思うほどの初心な表情を浮かべた茉莉。

「……………好き……………うっ」

言ったは良いが自分のセリフで自爆しかけてうるたえた現。これ
もまた「なにこの可愛いの」。

「ほう。三人で一人の男をめぐって争っているのか。大変だな」

何処か他人事なラウラ。彼女の自信に普段の状況を知る鈴音だけが溜息をはく。

「さ、三人じゃないのよ！」

例の如く復活したメリールが悔しげに叫んだ。その心からの叫びに茉莉と現も「うっ」とダメージを負う。

「他にもいるわけ？」

なんとなく同じ匂いにするメリール達に俄然興味が湧く鈴音。ラウラは物語でも聞くかのような表情だ。

「いるのよ。笑顔の可愛いフランス人やクールで美人なフィンランド人、大和撫子を具現化させた日本人、そして極めつけはアイドルときてる」

綺麗で巨乳な日本人、容姿端麗なイギリス人、下手したら誰よりも近い位置にいるフランス人などを相手にしている鈴音も多少驚いた。

「あんたも苦労してるのね」

「く、苦労なんてしてないわよ！ 私が勝つに決まってるの！」

そのメリールの言葉に突っかかる若干二名。

「まだ決まったわけじゃないよ！ 私も負けないもん！」

「……………明日香は私が……………道化師
憲章……………」

（道化師憲章？）

鈴音、ラウラは当然のことながらメリールや茉莉さえもそのワードの意味は分かっていない。

「ふん、それにしても大変だなお前たちも」

夫のいるラウラには何処吹く風。

「あんただって油断してると宙盗られるわよ」

「そんなことはない！」

自信満々だったラウラの顔に僅かに影が差す。

「えっ？ 普通『夫』って盗られるものなの？」

既に宙「ラウラの夫神話が完成していたメリールはキョトンとした。ちなみにキョトンとしたのはメリールだけだった。

「どうしたら落とせるのかしらね」

何時に無く神妙な面持ちで鈴音が唸る。

「水攻めがいいんじゃないかな？」

「城じゃないわよ！」

完全に打ち解けていた女性陣には既に冗談を言えるほどのムードが空間を支配している。ここでの主な尽力者は茉莉であり「水攻め」も茉莉である。

「や、やっぱり胸が大きい方がいいのかな？」

メリールの発言により四名の被害者が出ました。

「そ、そ、そんなことあるわけじゃない！ い、一夏はその・

・小さい方が・・きつと・・」

と徐々に自信を失くし覇気が無くなっていく鈴音。

「やはり胸は大きい方がいいのか・・」

と一瞬悩みつつもそれは宙の好みだから仕方ないと男前なことを考えるラウラ。

「・・・・・それは・・・・・難しい」

と自分の小さな膨らみを見つめつつ落胆する現。

「大体、男子はどうしてそんなに大きい胸が好きなのよ！」

と明日香が聞けば俺はそうでもないかと答えるだろうに勝手に巨乳好きだと決めつけたメリール。

（無くはないし・・・・・ちょうどいいサイズなんじゃないかな？）

と口には出せないものの心の中で少しガッツポーズをした茉莉。

「あゝもう！ 無いものを考えてもしょうがないじゃない！ 折角違う世界（？）みたいな所に運ばれたんだからそれを活かさないわけにはいかないわ！」

復活した鈴音は勢いよく立ちあがり一夏がいるであろうドアの方向を睨む。

「活かすとはどうするのだ？」

ラウラが鈴音に問う。

「当然、一夏に優しくしてもらってことよ！」

クリスマスと似た様な処遇の女性陣を見て鈴音は多少ハイ状態になっていた。

「やさ、しく!?!」

何を想像したのかラウラが驚くほどのスピードで全身を赤く染めた。

「なるほど！ じゃあ、私も明日香に！」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！ 茉莉は普段から一緒に住んでるんだから少しは譲りなさいよ！」

「えゝ それは関係ないよ！ だってメリールは明日香と同じ学校に行ってるじゃん！」

「うっ」

鈴音から発生した『優しくしてもらいたい』菌はあっという間に伝染しもはや治療薬は存在していなかった。

「でも、どうしたら優しくしてくれるんだろう？」

茉莉が素朴且つ一番の難題を口にする。それを聞いた女性陣は一片に黙り込んだ。ちなみにラウラはまだ「優しく・・・宙がわたしに・・・」とうわ言のように呟いていた。

「普通、クリスマスなんだから言われなくとも優しくするのが本当よね！」

ある意味本末転倒なことを鈴音が漏らす。そして一夏にそれを求めていいのかそれも分からない。

「す、素直に甘えてみる……とか？」

茉莉の発言に鈴音とメリールが「それは……」と今世紀最大の思案顔を浮かべた。それはさすがに恥ずかしいし悔しいしでもと二つの乙女心が戦っていた。そして、それが出来そうな人が目の前にいるのも決して起爆剤にはならず微妙な棘となり心に突き刺さる。そんな複雑な心境が絡み合う何とも言えないもどかしさが感じられる。

茉莉は茉莉で普段そういうことをしないメリールのそういう姿は破壊力があるだろうな、と乙女の危険察知レーダーと多少のオタクの血が警鐘を鳴らす。

そんなことを皆が考えていると「あっ」と茉莉が言って急に頬を朱に染めた。

「どうかした？」

鈴音とラウラ、そしてメリールと現が訝しげに茉莉を見つめる。すると、

「明日香って優しいんだ」

と言った。

「……は？？？」

眼が点。それが今の四人の状況を一番的確に表現していると思われる。

「あっ、いや素直に甘えるにはそういう雰囲気っていうか、心構えていうか、そういうのが必要かなって思ってた。だから明日香の良い所を……そ、そんな目で見ないで！」

ちなみに四人の目は哀れみや慈悲ではなく羨望だった。

「い、一夏はか、か、格好いいのよ！それに背も高くなってるし……時々ドキツとすることを言うこともあるし……」

鈴音も茉莉に影響されもとい乗っかり好きな人自慢を始めた。

「明日香は……『そういうの』は鈍感だけどそれ以外はすごく人の気持ちが分かって優しいし、強いし、一緒にいると安心するし……」

メリールは途中でソファに顔を埋め「ううゝ ううゝ」と唸り出した。その顔は真つ赤に染まり皆が心の中で「がんばったね!」と激励の言葉を贈った。

「私は断然『強さ』だ。宙は強い」

強さ。それに必要なのは『優しさ』か『勇気』か『希望』か。明日香がこの場にいたならば、そんなことを考えるのではないだろうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・で・・・・・・・・・・
だし・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・それに・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・みたい・・・・・・・・・・」

主に接続語しか聞こえないくらいの小さな声で明日香評を語る現。まだ唸っているメリール以外の三人が耳を現の口元に近づける。一秒、二秒、三秒・・・・赤、紅、真紅・・・・予想以上の明日香評に他の面々の方が恥ずかしくなり自分のことのように顔色が変わっていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・の・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・だった時・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・それで・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

現の明日香評はSSくらいなら書けそうなほどだった。しかしそれは彼女たちを萎えさせるどころか逆に好きな異性談議をより一層激化させた。

「ていうか一夏は鈍感過ぎるのよ! 唐変木!」

「あつ、明日香も恋愛系のことには鈍感だね。もしかして先生のせい?」

「先生とはなんだ?」

「明日香には尊敬してる探偵の先生がいるのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・明日香の夢は探偵」

可憐な花が語るのは初めて出会った王子様のこと。

「強さとは想いの証明だな、うん」

「明日香も強いよ？」

「い、一夏だつて負けてないわよ！ そりゃ普段はあかかもしれないけど、でもいざつて時にはす、すごいのか、格好いいし・・・」

「ダメだ。鈴音ベタ惚れじゃない」

「あんたもでしょうが、メリール！」

それぞれに美しい色を持つ花々は今、想い人を心に映し麗しく咲き誇る。

「・・・・・・夕陽・・・・・・お嫁さん」

「「えっ!？」」

「うん？ 現が明日香の嫁だったのか？」

「いや、これは・・・そういうんじゃないと思うわよ・・・」

「聖夜に咲くはシクラメン（恥ずかしがり屋）、アイスランドポピー（気高い精神）、カトレア（純粋な愛）、ストック（見つめる未来）、そしザンカ（直向な愛）。

「どんなお願い、しようかな？」 ワクワク

「そうだな・・・私は宙に・・・」 真紅の頬で真剣に。

「わ、私は別にお願いとかそういうのは・・・・・・うううううう」
「恥ずかしい。でも・・・・・・」

「・・・・・・」 初心な願い事が

溢れそう。

「一夏にお願い・・・・しちゃうんだ・・・・あたし・・・・一夏」 恋に酔うのは十代乙女の特権です。

「想いの形はそれぞれ違うけれど、その強さは皆溢れんばかりで。伝えたくとも伝えられないもどかしさに心が痛む。それでも彼女達は進むだろう。」

「みんなでやれば恥ずかしくないよね？」

「そうだな」

「・・・・・・うん」

「そ、そう・・・・・・なの？」

「ま、まあ、もうここまで来たらやるしかないでしょやるしか！」
だから今宵、夢の時間を運ぶサンタクロースは彼女達に微笑みかけるに違いない。

「……いざ！……！」

聖なる夜に魔法をかける、その為に。

？

恐怖とは突然やってくる。

「やらないか」

一夏が急にそんなことを言いだした。

「アッー！」

怖すぎた。もう「皿が一まゝい、二まゝい」とか多少余裕のあるレベルではなく「皿が九枚！ 足りん」くらいのスピードがあつた。

「冗談だよ」

「一夏よ、冗談に聞こえなかった」

「演技にはできすぎだな」

てつきり鈴音さんと付き合ってるばかり思っていたが……まさか一夏の正体がこんなだったなんて。リアル下手物に耐性は無い。というわけで、

「え？ ちょ、なんで距離をとるんだ！？」

「危ないから」

「口をそろえて言うなー！」

逆に問いたい。急に「やらないか」なんて言う奴が近くにいたら逃げるだろ。最大譲歩でも他人のフリだ。そして今更ながら宙と俺との距離が大分近くなった気がする。原因はどう考えても妹だが。しかし似た境遇の人がこうも簡単に見つかるとは。あれ？ もしかして実はこれが普通の兄妹像なのか？ いやそれはないよな。うん。

そんなことを考えていると実に自然に宙が俺に質問をする。

「で、あいつらの誰が好きなんだ？」

「好きなんだ……?」

状況を整理しよう。たぶん宙が言いたい『あいつら』はメリール達のことだろう。で、誰が好きか? ああ、成程。

「いや、誰が好きかと聞かれても。でもどうしてそんなことを?」

「いやー、聞いてみたかったんだよ」

打ち解けたことが分かる笑い声を上げながら宙が返した。

そうだな……。友達としては全員好きなんだがそういう質問ではないだろう。というか明らかにこれは恋愛系のお話だ。男同士でもこういう話するんだな。男友達が少ないとどうも経験が無く知識だけでは追いつかない部分がある。

「こいつもお前と同じ状態かもな」

そう言っただけ宙は一夏の肩を抱き寄せた。そうか、一夏にも女友達が多いということか。今度は一夏に親近感が湧いてくる。

「そんな羨ましいやつじゃないって」

たぶんTND学園一年一組でその発言をしたら一夏は一日で村八状態になってしまうだろう。まあ残念ながら今の俺は村八とまで言わなくてもそれに近い状態ではある。何時も男子には避けられる。そんな時は一先ず思春期のせいにするのだけでも。

「で、結局どうなんだよ?」

一夏も宙に乗っかり俺に『どの娘が好きなのか』を問うてくる。はつきり言えば現在俺は恋をしていない。言い方によっては『していた』が正しい感じだ。だから誰が好きなのかと問われても困るのだ。

「いや、特に好きとかそういうのは無いんだが」

そう返すと宙は何処か呆れたと言わんばかりの表情を浮かべた。しかしそれが事実なのだから仕方ないだろ。

「それよりラウラさんは宙の奥さんなのか?」

とりあえず『お返し』と微笑ましさと可笑しさを込めて俺は宙にそう問うた。

「ん、難しい」

「確かにな・・・」

宙だけでなく一夏も一緒に悩み始めた。こちとて宙が十六なので結婚出来るわけがないことは分かっている。もしかしたら許嫁的な小説やアニメでしか見たことのないレアな状況を目の当たりに出来るのかと思いい興味が湧いたただけだった。

「引きずってんだよ。俺が色々とな」

宙はそう答えた。その表情は焦燥と若干の苦悩、自分への不甲斐なさなんかで構築されていた。

多少空気が悪くなってしまったか、と少し焦ったがすかさず一夏が、

「で、はぐらかしたつもりか？」

と蒸し返した。文法的に俺の好きな人の話なのだろうが、俺としてはもう終わったとばかり思っていたので若干虚をつかれた。

一夏はニヤニヤと笑いながら詰め寄ってくる。この状況で俺が言える事は唯一つ。

探偵の卵をなめるなよ！

「そういう一夏の方はどうなんだ？ 鈴音さんとの関係は？」

俺の言葉に一夏は「り、鈴のことか？」と少し頬を高揚させている。THE 転換とはこのことですよ旦那。

さっきの威勢は何処へやら、一夏は完全に話をはぐらかされた。

すると一夏は俺の方を向いて、

「り、鈴てさ・・・メリール・デイソンさん？ に似てるよね」

と、明らかに逃げの言葉を発した。

しかし、言われてみるとそうかもしれない。髪型はツインテールで口調も自称以外は似ているし体系も似ているような・・・如何、これ以上考えたら蹴り倒されそうだ。

「関係ないだろ、一夏」

「て、宙！ お前どっちの味方だよ」

完全に動揺している一夏を見て少し可哀想かな？ と思っただが脳

裏に「やらないか」と言った一夏が浮かび考えを改めた。

「さあ、言おうか一夏」

俺と宙は一夏に詰め寄る。

「う、うううううう」

一夏は今まで以上に狼狽ししどろもどろになっている。その横でニヒルな笑みを浮かべた宙が気になったが、まあ今は考えないことにしよう。

クリスマスパーティーの神様は俺達にどうしろと言っのか。

「どうしてこうなった？」

宙が呟くのも分かる。なぜなら今俺達が遭遇しているのは空気がピンク色に染まった女性陣だからだ。どれくらいピンク色かと言うと

「撫でる宙」

ラウラさんが真面目な表情で宙にそう言った。

「まじで？」

「まじだ」

「まあ、いいけど・・・」

宙も満更でもない感じでラウラを撫でる。

「い、一夏。ちょっとそっちにめなさいよ」

鈴音さんが一夏の座っている場所に歩み寄り、恥ずかしそうにしながらも嬉しそうにそう言った。

「急にどうしたんだ鈴？」

「いいから・・・よつと」

訝しがると一夏を無視し鈴音さんは彼の隣に無理矢理割って入った。

「狭いだろうが」

「これがいいのよ」

鈴音さん嬉しそう。そしてラウラさんも満足そうに頬を緩める。

これは所謂イチャイチャというやつだな。リアルで見ることが出来るなんて。本日何度目かの未知との遭遇。

そんな彼らを微笑ましく見つめていると、

「あ、明日香！ え、えっと……ちょっとそこに座りなさい！」

メリールが少し震えながら俺にそう言って椅子を指差している。

「なぜ？」

「いいから！」

仕方なく俺は座った。何だろっこの嫌な予感。

俺が座るとメリールは無理矢理俺に背を向ける形で、俺の前に座った。要は俺がメリールを後ろから抱いているような形になっている。

「ちょ、なんだなんだ！？」

俺の言葉など無視しメリールは幸せそうに微笑んでいる。さっき宙達とした恋話のせいで余計に意識してしまうメリールの温かみや鼻を通るいい匂いで俺は紅くなっているのを隠し切れていない。やはり。非常にやばい。

「はい、交代！」

にこやかな毒気の無い笑顔で俺は茉莉から引つ張られた。助かった……このままでは正直やばかった。

不満顔のメリールを横目に茉莉は俺をソファに座らせる。そして彼女自身は俺の隣へ。

「じゃあ今度は私の番ね」

「うん？ 茉莉の ドアツ」

茉莉は急に俺の頭を掴み、その柔らかな膝へと……ああ、これが伝説の膝枕ですか。

「……半ば諦めているんだが、これはなんだ茉莉？」

「うっっん、折角のクリスマスなんだから優しくしてもらおうと思っ
て」

「でもこれは俺が優しくされてないか？」

「いいのいいの」

それにしても膝枕ってこんなに気持ちがいいんだな。ふと視線を

動かすと宙が優しくラウラさんを撫でている。一夏も鈴音さんとい
い雰囲気だ。本当にあいつらは付き合っていないのか？ お似合いに
しか見えん。

「じゃあ、明日香。交代ね」

「うん？」

俺は起き上がり茉莉の方を見ると、茉莉はスタツと後ろに跳び、
俺と茉莉の間に今度は現が入った。さっきから言ってる交代って俺
を順々に回しているのか。なんとなく複雑な心境だ。

「……………明日香」

「うん？」

現は下を向いたまま小さな声で俺に話しかける。そして俺の左側
に立ち「動くな」と言うように両腕で俺の左腕を抱く。そして暫く
黙った後、それは起きた。

チュ

頬にキスをされた。現から頬にキスをされた。うああああああ
あああああああああああああああ！

「……………あつ！？」「……………」（鈴音さん、ラウラさん、メリール、茉
莉の声）

「おつ！」「（宙、一夏）

「キャ……………」

「……………」（美和）

「現、それは反則！」「現ちゃん、ずるいよ……………」「さすがに真
似できないわ」「その手もあるか」

「やるな、明日香」「これは……………」

「お兄ちゃん……………」
「……………」

ああ、天国と地獄ってこれのことだな 俺はそんなこと
を考えながら、それでもキスの感触を思い出しつつ一言。
「クリスマス……………だな」

？

騒がしくも楽しい一時に終止符を打つのはこの聖夜を彩った主。

「やー、やー明日香君！ 楽しんでる？」

意気揚々と村雨家に入ってきたのは他でもないメアリーその人であつた。

「「メアリー博士！？」」

メリール、現、そして明日香は同時に彼女の方に向き直る。

「ふふん、私のプレゼントは喜んでもらえたみたいだね！」

その言葉で明日香は悟る。これは全て仕組まれたこと。博士が宙達をこの世界に呼んだのだと。

「でも、人の夢は儚いんだよ……」

「博士、それ言ってみただけですよね？」

「まあね！」

いつもと変わらぬメアリー。しかし、誰もが『終わり』を認識していた。

「これを見てよ」

そう言つてメアリーが取り出したのは箱状の何か。それを見た異世界の住人である宙達が反応する。

「あれ？ それどこかで……」

「これはね、人を平行世界に運ぶ道具なんだよ！」

「えーーーーー……」

「！？」

その場にいた全ての者が驚嘆する。

彼女によれば、偶然異世界の人間とコンタクトが取れ、そちらから人を送るので時がくれば帰してほしいという感じで話が進んだのだという。迷惑極まりなかった。

「お前達、戻れるかもしれないぞ」

明日香がそう言つと宙は喜び半分悲しみ半分という顔をする。そして「そうか……」と返した。

それに対しメアリーが一言。

「あゝ 急いで帰らないと色々和不味いんだよね〜」

「それを先に言え！」

一夏の盛大なつつこみが入った。それをメアリーは嬉しそうに聞いている。

「いくか・・・」

宙の言葉にラウラが「いいのか？」と顔を覗き見る。すると、

「未練がないと言ったら嘘になるが、言葉を飾るのに意味は無い」と、そう言って歩き出した。

「かつこつけすぎだ・・・たく、また会おう」

ラウラも宙に続きメアリーの元へ向かう。

「そうね、また会いましょう」

「じゃあな」

鈴音と一夏もそれぞれ一言残し後に続いた。メアリーの持つ装置の近く寄って立つ。

「博士、どうせ外部に起動装置かなにかあるんでしょ？」

「ご名答〜〜〜〜」

宙は勝手知ったるこの装置から明日香を離すため手で「近づくな」とジェスチャーした。

「じゃあな」

明日香は在り来たりな、誰もが使うそんな言葉で彼らを見送る。

その言葉の主成分は「さよなら」ではなく「また会おう」。どんな臭いセリフより明日香はそんなシンプルな一言を選んだ。

そんな姿に宙は微笑み、そして

「中々面白かったんじゃないかい？」

「そう？」

星空の下、一人の男と一人の少女が村雨家を高い塔から見下ろしていた。

「私には関係ないから」

「素っ気ないな」

少女は大人びた表情で退屈そうに呟く。

「とはいえ『ある天才』が異世界の天才を見つけ、交信。そして人間を転送。科学の進歩はすごいな」

青年は一人達観し微笑を浮かべた。

「でも正規の世界に送れなくしたのは誰だったっけ？」

少女が青年に意地悪な笑みで返した。青年は「あはは」と誤魔化すように笑い続ける。

「仕方ないだろ？ 送られる人間からしてみたら平和な世界の方がいいに決まってる」

「それで？ この世界はどうするの？」

青年は少女の問いに思案顔を浮かべた後、返答した
「消す、しかないかな」

と。

「じゃあ、行こう！」

少女は屈託のない笑顔で青年にそう言うと手を引き無理矢理歩き出した。青年は苦笑しつつも歩みを止めず進み続ける。

「メリークリスマス」

彼はそう言うとうと右手を高らかに掲げ、指を鳴らした。

その音はサンタクロースの鈴の音のように町中に響き渡り、そして消えた。

IS(sirasu)×クラウン・タイム！(晴野有希)

Christmas

如何だったでしょうか？

何時もと違う明日香たちの姿が見られたのではないのでしょうか。

機会があればまたコラボしたいと勝手ながら思っています。

では、皆さまメリークリスマス。

そして、良いお年を。

離魂 第一話「交錯と歪曲」

第一話「交錯と歪曲」

六月一日。早朝。

また一週間が始まる。

月曜日ってやっぱり憂鬱だ。

俺は目覚ましを止めつつ、部屋を出て右側へ曲がって

ゴツッ！

えっ？

俺は壁に激突した。

額が異常なまでに赤くなっている。

なぜぶつかった？

まず俺の頭の中にある疑問はそれだ。

俺の家の二階には部屋が六つほどある。

階段は一番奥。

俺の部屋は真逆の奥。

向かって左側。

茉莉の部屋が俺の向かい。

よって俺は部屋から出ると階段へ向かうため右側に曲がる必要がある。

俺は今それをした。

そして壁にぶつかった。

俺は暫くその場に座り込み少しさえた頭で考えていると、俺の前の部屋の扉が開き、中から人が出てきて、

ゴッソッ！

と壁にぶつかった。

俺と同じことをした！　なんて半ば面白いがる時間さえ神様は与え

てくれなかった。

目の前で壁にぶつかったのは【俺】だった。
もつと言えば【村雨明日香】がぶつかった。
俺の前で。

「いた~~~~い」

やわらかい声で俺が唸っている。

夢？ これは夢？ いや、さっきの激突は痛かった。
だとするとこいつは俺で、じゃあ俺は……………

「あれっ？……………えっ！？」

俺を見た【俺】が絶叫を上げた。

こんな言い方はおかしいかもしれないが、大方理解した。
最近魔法関係のことで耐性がついていてあまり驚かなくなった。
人間、慣れるのって怖いね。

まあ、ドラゴンやその使い手、魔法使い通しの戦争にククク魔人
そりゃ異常事態にも慣れる筈だ。

さて、じゃあ、一応確認してみますか。

「俺と茉莉が入れ替わった」

【俺】は今にも気絶しそうになっている。

「さてと、どうしたもんか」

俺は茉莉（姿は俺）とリビングで話しあいを始めようとしていた。
さすがに今回の問題は難しい。

なにせ俺個人だけの問題ではない。

わかってるのはブロボかその周辺による仕業であるということ。
俺は知っていることは一通り茉莉に話した。

俺が魔法使いであると告白した時よりもは時間がかかったが、な
んとか理解してくれたらしい。

この理解力は凄まじい。

「そ、それで、どうすればいいの？」

弱弱しく茉莉（何度も言うが姿は俺）が問うてくる。

見た目がものすごく気持ち悪い。

「そうだな。今のところリリパットも出てこないし、ソニア達からも何もない。なんとかして連絡をとるとして、今日は………」
学校休むか？」

個人的には休みたい。

茉莉が俺を演じ切れるかが心配だ。

俺も茉莉を演じるのは至難の業だ。

「うん。そうだね。今日はお休みしようか。でも、明日は大事な試験があるんだ」

「じゃあ、明日は行こう。今日中にこの現象が丸く治まるとは思えないけど。とりあえず今日は休もう。明日は明日考えればいいし」
とは言うものの内心はかなり焦っている。

いくらなんでも入れ替わりはきつい。

当然だが俺と茉莉は頭同士をぶつけたりはしていない。

明らかに魔法の力だろう。

なんとか奇巖城へ行ってリリパットか蒼き三姉妹に会う必要がある。

「とりあえず、気持ちの整理も必要だろ？ 一回部屋に帰るか。それぞれ」

そうして俺達は解散。

それぞれの部屋（俺は茉莉の、茉莉は俺の）に入った。

色々心配なことは多々ある。

一つはこの現象がこのまま平行線に進むのかどうか。

悪化すること考えられる。

思考が相手と同じになったり相手の記憶がわかったりするかもしれない。推測ではあるが。

二つ目はそれぞれの精神面。

姓さえ逆の体に長時間入り続けることでなんらかの精神病にかからないとも限らない。

三つ目は茉莉のこと。

今までといい、今回といい、あまりにもすんなりと理解しすぎている。

溜めこんだ末に大爆発なんてことが起きなければいいんだが。

俺は少し落ち着かない気分を無理やり落ちつかせ、奇巖城へ行くことにした。

できれば気付きたくなかったのだが、どうも俺は奇巖城に行けな
いらしい……………

そして「クラウン・タイム・エチュード」も使えない。
簡単に言えば大ピンチだ。

大好きな六月、梅雨時に入って早々この仕打ち。

でも、逆に言えば茉莉が奇巖城に行けるのではないか？

そしてクラウン・タイムも茉莉が現在使えるのでは？

思い立ったが吉日。

茉莉に試してもらうか。

俺は部屋を後にして気がついた。

普通、部屋に割り振り逆じゃない？

？

「それで、どうやったら奇巖城に行けるの？」

茉莉は濡れた臉を拭きながら明日香に問うた。

「目を閉じて、行きたいと思えば行ける。意外と単純だろ？」

「うん……………」

茉莉は数秒間俯いたまま自分の足元を見つめていた。そして、

「うん！ 行ってくる！」

と言って茉莉は瞳を閉じた。

明日香の気配が遠ざかっている。

恐怖心が芽生え茉莉は目を開けた。するとそこには、

「うつ………わ~~~~」

目を見張るほどの大きな城が月夜の中そびえたっていた。

（ここが、奇巖城………?）

茉莉は機械的な動きで城の扉の前までやってきた。

大きな扉には読めない字で何かが書かれている。

ふと、茉莉が後ろを振り向くと、そこには大きな庭が広がっていた。

「うわああ！　すごい！」

しかし、茉莉はある違和感に気がついた。

その庭には季節が無い。

あらゆる季節の花がそこにはあった。

スターチス、ひまわり、ノースポール、芍薬、ビヨウヤナギ、デンドロビウム、そして茉莉草。

それらの花が庭の中で咲いている中で、よく見ると城の周りには、
『私を忘れないで（スイートピー）』ジャノメエリカ『孤独』アネモネ『寂しさに耐える（カタクリ）』
『薄れゆく希望』
などが咲いていた。

大きな割に扉は簡単に開いた。

茉莉が一步中に踏み込むと、

ボン

と柱時計が鳴る。

「五十嵐茉莉」

少女の声が茉莉の名を呟いた。

茉莉は姿の見えない声に対し、

「だ、だれ!？」

と肩を震わせながら尋ねる。

「ボクは夢香。村雨夢香」

少女はそう言うと言正面に有る大きな扉から音もなく現れた。

「奇妙な魔法。こちらの世界ではその姿か」

言われて茉莉は自分が本来の【自分】の姿であることに気付く。

「あなたが・・・・・・・・・・夢香さん・・・・・・・・・・？」

「そう。明日香がいつもお世話になってます」

夢香は何処か余所余所しく茉莉に言う。

「いえ、こちらこそ」

茉莉は多少戸惑いながらも明日香が作り出した女性を見つめていた。

（あれが、明日香が生んだ女の子か。もしかして、ああいうのが好きなのかな？）

こういう事態の時でも乙女心は変わらない、ということか。

「そ、それで、この魔法のことなんですけど！」

茉莉は我に帰り夢香に詰め寄った。

「ボクにもどうしようもないよ。この入れ替わりは事例が違う。あなたも分かっている通り、『アニメ』とかでは普通、何らかの接触によって入れ替わりは起こる。まあ、今回はそれが魔法になったということだけでも、だったら明日香はここに来れる筈。でも明日香は来れずあなたがここに来た。奇巖城へのアクセスに【身体】は関係が無い筈。しかし、【精神】ではなく身体が影響し、明日香は奇巖城へも来れず、クラウン・タイムも使えない。しかもあなたは精神だけがこちらに来ている。以前の明日香なら体ごと持ってこられた。明日香やあなた風に言えば、これは『最終回から二話前くらいに来る大ピンチ』かな」

茉莉の動揺も気にせず夢香は一気に話した。

（ていうか、どんだけ私と明日香ってオタクっぽく思われているんだろう？）

色んな意味で不安になる十五歳。

？

茉莉は眠ったようにグタツとなったので俺は茉莉をベッドに寝かせた。

体は俺なので重いのでは？ と思ったそこの君！ いや何処の君だよ、と半ば自暴自棄気味だな。

ちなみに俺の体重は四十二キロ。

・・・・・・そうです、軽すぎです。

なんだっけ？ あの健康を示す数値が『十四（一番健康的なのは二十くらい）』だった。

大丈夫です。頗る健康ですから！

あつ、この数値は身長×身長を体重で割ってくださいね

俺は何を言っているんだ？

俺は茉莉の体を弄びつつ、一階のソファでグタ〜としていると、ある意味で今一番聞きたい声が俺の耳に届いた。

「元々可愛らしい顔が益々可愛らしくなったな、ククク」

「遅いぞ、リリパット」

「ククク、迫力がないな」

リリパットは俺の姿（正確には茉莉の姿）を賞めるように見つめた。

「ククク、プロブだな」

「やはり、か」

プロブ。ブラックイリユージョニストの中でも恐れられている存在。

「プロブの常套手段。ククク、怪奇現象はこれだけじゃないぞ。クク、いいか。今の我は残念ながらこれしかいえない」

リリパットはそれから何かを追うように目線を泳がせた後、

「絆を忘れるな」

と、そう言った。

？

茉莉と夢香が向かい合ってテーブルに座っていた。

「リリパットが明日香に接触」

夢香が業務連絡のように呟いた。

「えっと………もしかして私のこと、嫌いなのかな？」

いつもは人からどう見られているかなんて茉莉は気にしない。しかし今回は違った。明日香が生みだした存在である夢香から自分がどう見られているか、それは茉莉にとって重要なことであつた。

「こんな時に何を気にしているんです？」

夢香は冷ややかに返す。

「あつ、いや、その………」

（この子、明日香に似てない！）

それどこではないでしょ？ と呟いてくれていた茉莉の天使はもうそこには居らず、色々聞いちゃえ！ と叫ぶ悪魔しかいなくなつていた。

「えっと、この入れ替わりは何時か戻るのかな？」

（まずは掴み！）

「戻ってもらわなきゃ困りますし」

空気が凍てつく。

「リリパットの反応が消えました」

尚も夢香は固い言葉で呟いた。

「今日は帰ります」

茉莉がそう言ったのはそれから五秒後であつた。

意識が朦朧とする中、茉莉は元の世界へ帰ってきた。

目を開けると目の前に自分の顔がある。

「大丈夫か、茉莉？」

（そうか、中身は明日香、なんだよね）

再び入れ替わりを認識させられ、ドツと疲れを感じる茉莉。

しかし、今の茉莉には明日香に言っておきたいことが一つだけあつた。

「どうした？」

急に不機嫌そうな顔になった茉莉に明日香が話しかける。

「おい、茉莉・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「あのさ、明日香」

「うん？」

茉莉は立ち上がり明日香を見下ろした。

初めての体験で少し茉莉は優越感に浸ったがすぐにそんな気持ちは醒め、

「夢香って『性格』は可愛くないね！」

と言って茉莉は部屋を後にした。

？

なぜ、茉莉は急に不機嫌に？

入れ替わりのせいで情緒不安定になっているのか？

それから夕食が済んでも茉莉は一言も口を聞いてくれなかった。

翌日。姉さんは俺達が休むと電話すると何故か昨日帰って来なかった。嫌がらせ？

俺はテストがあるので茉莉の学校に行くことにした。

「茉莉は別に行かなくてもいいんじゃないのか？」

茉莉は現在、TND学園の制服を着て出かけようとしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無視、ですか。

知っていますか？　どんな罵倒よりも暴言よりも無視が一番辛いつてことを！

そんな俺の心の叫びは届かず、茉莉は終始無言のまま登校して行った。

霧百合高等学校園。

ものすごいお金持ちの集う学園。
さすがに違うな雰囲気だ。

一年五組、それが茉莉のクラス。
クラスの生徒数は二十人と割と少数。

しかし、男子十人に女子十人という綺麗に揃ったクラス。

教室はTND学園とは比べ物にならないくらいピカピカしている。
床がまるで伊 丹だ！

と、そんな感動を表に出さないように教室へ入ると、

「おはよう茉莉！ 昨日は風邪？」

とハイテンションな短髪少女（たぶん運動部だろうな）が駆け寄ってきた。

「うん。心配かけてごめんね。もう大丈夫みたい」

俺は茉莉の口調を真似、自然に返す。かなり自信あり。

「ふっふっふん、じゃあ、愛しの明日香様に看病してもらったとか？

コノコノ！」

.....

えっと、何て返したらいいんだ？ 日常茶飯事な会話なのかこれ？

「えっと、別にそんなことしてもらってないよ」 気が利かないんだもん！」

これは一種の自虐ネタだな。

「あれ〜〜 いつもの茉莉と違う！」
ヤバッ！？」

「もう、喧嘩でもしたの？ 珍しいな茉莉が明日香君のことを貶すなんて。明日、雪でも降るんじゃない？ アハハ」

「そ、そうかな？ アハハ」
セーフ、だよな？

危うくバレルかと思った。でも、まあ普通の人の想像力じゃこの推理は無理だよな。

たぶん。

そんなこんなで私立の学校生活を堪能しつつ、時々「今日の茉莉

は明日香君に冷たい」などと言われながらも、なんとかこなしただ。今日の感想と叫びたら、この最初に話しかけてきた娘以外茉莉に誰も話しかけてこない。

友達が少ない……のか？ まさかな。

そんな放課後。

事情が事情だけに速く帰ろうとしていたら、

「あら、五十嵐さんもうお帰り？ いつものは惚気はないのかしら？」と明らかにアニメじゃ意地悪な敵キャラとして登場しそうなお嬢様ぶった女性が俺の前に立ちふさがった。

「えっ？」

さすがにこういう登場人物は想定外だ。さて、どうしたものか。

「フフフ もう明日香さんには飽きたのかしら？ それとも他の人に取られたとか？」

妄言者（この女）をなんとかしなければ！ それも早急に！

「まあ、あんな貧乏くさい男に惹かれる女性も女性ですわね。わたくしには何処がいいのかわかりかねますわ」

俺ってこの人に何かした？ ここまで言われなきゃなのか？ ま

あ俺は確かにもてないけどな。

多少精神的苦痛を味わいつつ俺はなんとか平常心を保った。

「そうだね。でも私に何でそんなこと言うの？ 別に私は明日香のこと好きだから一緒に住んでるわけじゃないよ？」

当たり障りのないコメント

「え！？」

のはずだったんだがその場にいたクラスメート全員の視線が俺に集められた。

「あなた、よくもそんなことが言えましたわね！」

「えっと、なにか変なこと言った？」

名も知らないウザキアラ女にそう返すと、

グイッ

「ウギヤ！」

後ろから襟を掴まれた。

顔が正面から百八十度縦に移動。この動きは正直死ぬる。

「茉莉どうしたの！？ まだ風邪治ってないんじゃない？」

襟を掴んだのは最初に話しかけてきた娘だ。

もう少し茉莉に学校での生活環境を聞くんだった。家とのキャラ全然違うみたいだ。

「ど、どうしてそう思うの？」

首を正常な向きに戻しつつ、俺は一応尋ねた。

「だって、いつもなら影で暴言吐かれたら真っ先に言い返すじゃない！ ましてや茉莉自身に向けて明日香君の悪口を言ってきているのにどうして言い返さないの！？」

俺よりもこの子の方が怒っている様子だ。肩まで震わせている。

「ねえ、殴りかかりなよ！ 私も手伝うよ！」

な、殴りかかる？

すると意地悪女が、

「今更、淑女ぶっても駄目ですわよ！」

などと言いだした。

茉莉って学校と家では大分キャラが違うんだ。

もしかして友達が少ないのもそのせいかな？

そうだとしたら俺の責任もあるな。

茉莉には悪いがここは。

「もう、言い返さないよ。好きなように言わせておく」

「え~~~~~！？」

教室にいた生徒全員によるフルコーラス「え~~~~~」をお送りしました。

「どうしたの茉莉！？」

「えっとさ、もし次にまたこんなことがあつて、私が言い返そうとしたら止めて」

「な、なんで？」

「なんでも！ 張り合つのが馬鹿らしくなっただけだよ」

茉莉にはこれが一番いい。
俺の為に孤立するのは良くない。
それから数秒間、この教室から音が消え去った。

Igarashi Side

いざTND学園に来てみると、右も左も分からない。
はあ、変な意地なんか張らなきゃよかった。

とは言っても今の私は明日香！ そう明日香なんだ！ 絶対に乗りきって見せる！

私はまず一年一組に入った。

「お、おはよう」

誰に言うでもないけど一応挨拶してみる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おはよう」

最初に話しかけてきたのは現ちゃんだ。

私の主観だと明日香の『女』友達の中では一番可愛いと思う。顔もキヤラも。

「おはよう」

軽く返して席に着く。

そういえば、どういう授業をしているのだろうか？

トルネードの実習以外は普通だと明日香は言っていたけど、学力レベルはどっちが上なのかな？

私が適当に授業の準備をしていると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、喋ってもいないのに突然ライラが存在感を発揮した。

「うわっ、えっとライラ？ どうした？」

今のは明日香っぽかったと思う。うん。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ライラは何も言わずに紙を私の前に差し出す。

『ご気分はどうですか、茉莉さん？』

「ああ、気分は……えっ!？」

バレてる？ えっ、バレてるの？ 何で？ 私、えっ、あっ、うえ？

『私はあなた方の関係者。知っていて当然』

「あっ、そうか。ごめん」

焦った。さすがに焦った。心臓に悪いよ入れ替わりは。

私は気持ちを落ち着かせつつ、ライラに質問する。

「戻る方法は？」

『今のところは分かりません。また、残念ながら私は干渉できません』

「なんで!？」

『私の職務ではないからです。故に下手に扱うと取り返しのがないことになりかねます』

「職務？ ライラはどんな職務なの？」

というか職務ってなに？ 段々話しについて行けなくなってきた。明日香は魔法使い。その事実は知っているけれど、どうも実感が湧かない。まあ、今回の入れ替わりでなんとなく分かった気もするけど。

『明日香さんを王と例えるなら私は左腕。簡略化すればそのようなもの』

「左腕？ じゃあ、右腕は？」

『……』

いや、いや、紙に『……』書かなくてもいいのに。

左腕か。それって明日香に近いってことだね。要は。それは少し、妬けちゃう、な。

『右腕はマロー』

「えっ？」

急にライラがそんな紙を見せてきた。

マロー？ 誰だろ？ 聞いたことが無い名前。

『ソフィー・マロー』

さらにライラは紙を出す。

ソフィー？　ますます分からない。明日香は知っているのかな？
たぶん、これは女性の名前だ。そりゃ、明日香の周りには星の数
ほどの女性が集まるだろうから見当もつかない。星の・・・数・・・
程か・・・。

気持ちを切り替える！　と言うかの如く、チャイムが鳴り響いた。

放課後。

下駄箱にラブレターが入っていた。

茉莉、どうする！？

差出人の名前は無かった。

ちなみに待ち合わせ場所は体育館裏・・・ではなくTND学園第
三グラウンド裏。

明日香の役は憂鬱だな、まったく・・・。
速く戻りたいよ・・・明日香・・・。

？

返答を考えつつ、茉莉は待ち合わせの場所へ向かった。
グラウンドの中で一番人目が少ないのがこの第三グラウンドであ
る。

茉莉が到着するとそこにはまだ差出人は来ていなかった。

（どんな・・・子なんだろう・・・？）

とりあえず返答は「考えさせて」にして、帰ってから明日香に聞
こうと考えた。

内心穏やかではない茉莉は無意味にソワソワする。

それから十分後。

一際暗い影から一人の女性が姿を現した。

ロングヘアで背は百六十程。

可愛いというよりは綺麗に属するタイプの女性だ。

「来てくれたのね」

声ははっきりしているが何処か寂しそうな声だった。

「うん………」

茉莉もどう反応してよいのか分からない。

すると、

「（ス）……………（ハ）」

とその女性は大きく深呼吸してから、

「ゴメンなさい」

とだけ呟くと、何処から取り出したのか右手に真紅に輝く日本刀のような物を持って勢いよく茉莉に切りかかった。

「！」

明日香なら咄嗟に反応が出来たかもしれない。

しかし、普段特別に動くわけではない学生の反応ではかなり遅れた。

（明日香！）

茉莉は死を覚悟し、心の中でただ想い人の名を叫ぶ。

その瞬間、

ビュン

地面に何かが激しく当たり、その衝撃で茉莉は後ろに吹き飛ばされる。

「あつっ！ えっ？」

茉莉の目の前の地面から煙が上がっている。

その奥を見ると刀を持った女性が茉莉と同じように尻もちをついていた。

茉莉は訳も分からず周りを見渡すと上空にトルネードを展開したライラがいた。

「ラ……………ライラ！」

「……………」

ライラは茉莉の声には答えず、鋭い眼差しを立ちあがろうとする

女性に向けている。

イニニューメラブル・ウイングを纏ったライラの周りに機械のフィ
ンが無数に現れる。

この機体は自分のエネルギーを使い、大小様々な羽を作りだす。
そのフィンの先端にはスナイパーライフルと同じ砲口が備えられ
ており、小さい羽を作り雨のように光線を放ったり、巨大な一つの
羽にし、アレラーテのような強大なエネルギー砲にもなる。

ライラは女性を見つめる。

そして女性もライラを見つめていた。

緊迫した空気が辺りに立ち込めている。

そんな時間が二十秒ほど続いたその時。

「我慢強いんですね、お二人とも」

急に女性の背後から少し高い男の声が聞こえた。

「！」

茉莉はその男を見て腰が抜けそうになった。

その男の顔はパツと見【村雨明日香】だった。

よく見ると少し明日香に女性の要素を足して（もともと明日香自
身中性の顔をしている）ほんの少し童顔にしたような男性だった。

「あな……たは？」

茉莉の反応をみた女性も振り返り同じような表情をしていた。

「ふふ そんなに警戒しないでよ、『五十嵐茉莉』さん」

その男はうすら笑いを浮かべながら言った。

そのセリフを聞いて、茉莉以上に女性が驚いた。

「えっ、明日香じゃない？」

あからさまに狼狽した女性はあたふたと茉莉と男を交互に何度も
見た。

「そうさ、【中身】が違う。中身は五十嵐茉莉という女性だ。ふふ
勘違い姫、この後のご予定は？」

その男は涼しい顔で話す。

「あなたは誰なの！」

女性は少し顔を赤らめながら怒鳴る。それはかなりの迫力で後ろから聞いていた茉莉までが身震いしたほどだった。

しかし男はその笑みを消すことなく、

「僕かい？ 僕は」

男は一瞬目線を茉莉に移した後、また女性に向き直る。

湿った風がその場にいる全員を撫でるように通り過ぎていく。

「僕は

【村雨 明日夢^{アスム}】

明日香の同素体？（ナンバーフォー）さ」

Dayson Side

絶対におかしい。

あつ、私はメリール・デイソン。

と言つてもこれは偽名。

本名を知っているのは親と博士と明日香くらい。

絶滅危惧種じゃない？

つて、そんなことはどうでもいい。

今日一日ずっと明日香を見てた。

まあ今日特別にずっと見てたわけじゃなくて毎日欠かさず……

・いや、今そんなことはど、どうでもいい！

今日の明日香の様子は変だ。

他の人は気付いてないみたいだけど、私には分かる。

なにせ過ごしてきた時間が違うのよ！

問題は私だけ気付いたって所じゃない。ここで私が相談にのって

解決するのが大切！

そしたら少しは明日香も私を……

うん、ガンバ私！

とは言つても、今日の明日香は人を避けている感じがする。

放課後も早々に教室を出て行った。

こうなったらあれよね、尾行。そうよ、悩みは身の回りから生じるものなのよ！ たぶん。

第三グラウンドに向かう明日香を尾行。

なんとなく嫌な予感がする。

ドラマでの告白シーンはほとんど体育館裏。

それに近いものを感じる。

昔から明日香はもてる。むかつくほどもてる。告白されるかは別としてもてる。

呼び出されているとしたらソワソワしていたのも頷ける。

尾行なんてしなきゃよかった・・・とは正直思わない。

茉莉、アレラーテ、丹花、ライラ、現、ついでに檸檬。ただでさえライバルが多いのだから、今日は敵を知るいいチャンス。

それから暫く待っていると女性が現れた。

同じくらいの年の女の子。

凄く綺麗で、スラッとしている。

胸は・・・小さい！ 私と同じくらいの貧乳！ あれっ、で

もこの学園にこんな女の子いたっけ？

その女の子は深呼吸すると、

「ゴメンなさい」

って呟いて走り出す。

その手には真紅の日本刀が握られている。その刀を持つ手先はプロのようだ！

まずい、反応が遅れ・・・た！

私が出ようとした瞬間、光線の発射音が響いた。

明日香はその光線のおかげで刺されなかったようだ。

その光線の発射主は

(ライラ・・・！)

ライラがトルネードで明日香と女の子の間に光線を放ったようだ。どうしたら、いいのか？ 私も出て行く？ でも、うん、行こう！

その決断に約二十秒。

(行け、わたし！)

出ようとした瞬間、別の人影が現れた。

慣性の法則………だったわけ？ 作用反作用？ 知らない

！ 勉強は苦手！ じゃなくて、それっぽいのをなんとか殺して私はまた物陰に隠れた。

昔から勉強は苦手。いつも明日香に教えられている。

今までで一番明日香に怒られたのは鎌倉幕府が出来た年は？ と

いう問いに、

『1192296年』と答えてしまったこと。

「お前、今を何年だと思っているんだ？」って言われた。

って、今はそれどころじゃないのよ！ ！ ！

出てきた人は

あす………

………

違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違う！

！ 違う！ 違う！

誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ！

！ 誰だ！ 誰だ！

明日香の真似をするのは誰だ！

その時感じた感情は今まで感じたことのない程、強大な憎悪だった。

？

【村雨明日夢】と名乗った男は、明日香の体を持つ茉莉、トルネードを纏ったライラ、真紅の日本刀を握った女性を一瞥した。

そして、不敵な笑みを浮かべた。

「意味不明………ですか？」

そう言った瞬間、茉莉の背後から爆音が轟いた。

その場にいた全員がそちらに目を向ける。

そこにいたのは、

「誰だ、お前！」

憎悪をむき出し、トルネード、ユア・ラヴァーを展開した【メリール・デイソン】だった。

「お前は誰だ！」

怒りに震えた両手にはビームライフルが握られている。

「説明しますよ。だから、少し静かに、してくれないか？」

丁寧な口調から徐々に暗く、恐ろしい声に変わって行った。

明日夢は右手を天に掲げ、指を鳴らした。

パチン

その音が水面に何かが落ちた時生じる同心円状の波のように広がり、世界は一変した。

茉莉の姿の茉莉、トルネードを解除されたメリールとライラ、そして刀を握ったままの女性。

四人は立っていた。

『縦横三百六十度暗い背景に光の点が幾つも並んでいる空間』

【宇宙空間】に。

四人は少しごつごつした巨大な岩の様なものの上に立っていた。

「ここ……は？」

あまりの驚きにメリールはさっきまでの形相から半ば無表情に近いものになっている。

さすがの茉莉もそう簡単には状況を把握できない。

ただ、ライラは動じずその場で静かに立っている。

そして、女性は頻りに何かを探していた。

「なんなのよ、これ!？」

今にも狂いそうなメリールが叫んだ。

「ここは『恐怖の谷』です」

そう言ったのは紛れもなく村雨明日夢だった。

メリールはその顔を見た途端、再び顔色を変え跳びかかろうとす

る。

しかし、その体は石のように固くなり動けなくなった。四人全員が。

「まあ、そう怒らないでください。説明します。その前に」

明日夢はまた指を鳴らした。

その瞬間、メリールは頭を抱え蹲る。

「うくっ……ああ……うくっ……」

苦しそくに悶えるメリール。

そして、すつくと立ちあがると、

「なんなのよ！　なによ、これ！　どうして『学園に【ドラゴン】なんかがいるのよ！』どうして！」
と叫んだ。

メリールは涙を浮かべながら叫ぶ。

「桜花さんは行方不明になっていて、動物園に変な機械が現れて、学園にドラゴンが……そして明日香がいなくなつて、必死で探して」

それは現場に居なかった茉莉までも心を抉られているような、そんな気持ちにさせる悲痛の叫びだった。

メリールは堪え切れず涙を零し、倒れ込む。

明日夢はメリールの消された（改竄された）記憶を修復した。

ドラゴンマスターによる襲撃などによる一連の記憶はメリールとアレラーテ、そして丹花の中から明日香によって消されている。

その記憶を蘇らせた。

一気に記憶がメリールの中に流れ込んで行つた。

メリールはそれから五分近く呻きながら倒れ込んでいる。

「あなた……何をしたの！？」

茉莉が明日夢に向かって叫ぶ。

「後処理を忘れていた。少し反省。さすがに同時期の記憶を混在さ

せるのは問題だな。消すか」

明日夢は例のごとく指をならす。

メリールの唸りがなくなる。

音もなく立ちあがり、

「もう……どうにでもなれ！」

それは全てをふっ切ったかのような声だった。

「説明、しましうか」

明日夢のそのセリフから現時点で起きていることの説明が始まった。

明日香と茉莉の入れ替わり。

それはプロブの【高等黒魔法】によるもので、ブラックイリユージョニストの中でも最高位の者にしか扱えない魔法だ。

それ故に解呪の方法は不明。影響拡大もあり得るらしい。

刀を持つ女性。

それは、ある意味で現在その場にいる人の間で一番気になることでもあった。

「私は何も話さないわ」

プロブの話しの間、律儀にその場で話を聞いていた彼女だが自分については何も語らない。

「なら僕が君について知っていることを話そう」

そう言ったのは明日夢だ。

明日夢のセリフにその女性は苦い顔をする。

「大丈夫。明日香君や君の【後ろにいる人】には分からないようにする」

【後ろにいる人】。それは彼女が何者かによって命令され明日香を襲っている、という意味なのか。それは明日夢と本人にしか分からない事であった。

「彼女の名前は【手束^{たつか} 無花果^{いちじく}】。十五歳。明日香をアナザーマジシャンにした張本人」

その言葉に茉莉は絶句、数分前に事情を聞かされたメリールは無花果を睨み（既に驚いているので茉莉ほど動揺はしていない）、ライラは既に知っていたのかは不明だが何時ものように沈黙を保っていた。

「簡単に言えば、以前にも彼女は明日香君を刺した。その時の日本刀の色は蒼。そして今持っているのは紅。危うく【二重魔導師^{インベルツ}】にされる所でした」

明日夢は続けて語る。

「二重魔導師と書いてインベルツ。いわば業界用語です。普通なら生まれる筈のない言葉と称してもいいくらい稀な言葉ですよ。アナザーマジシャンとなった者が二つの魔法使いの力を持つ。今回の場合は蒼と紅の混色になる所でした。なぜ、そんな『危険』なことをしたのか、まあ聞いても答えてくれないでしょうけど」

そう言って明日夢は含み笑いをし、無花果を見つめた。

無花果は終始無言のまま俯いていた。

そして、

「・・・・・・・・・・・・・・・・明日香・・・・・・・・・・・・・・・・」

とだけ呟いた。

「明日香君風に言えば【イチジク】さん、ですか？」

それはほとんど変わらない発音の違いだったが、無花果にとっては完全なる挑発行為だった。

「その呼び方はやめろ！」

無花果は真紅の日本刀で明日夢に切りかかる。

「ふっ」

明日夢は息を吐くと一瞬で無花果の背後に回る。

「なっ!？」

無花果は前方へと進む自らの勢いを殺すことができない。

「また会いましょう」

明日夢は皆に聞こえるようにそう言つと風に舞う砂のように消え、空間が歪みそこにいた女性陣は不愉快な浮遊感を感じながら元の第三グラウンドに戻っていた。

ライラはいつの間にか姿を消した。

メリールと明日香の姿の茉莉は放心状態。

無花果は刀を握ったまま夕陽を見つめている。

先に正氣に戻った茉莉は無花果を見つめていた。

その視線を感じ取ったのか、無花果は茉莉とメリールを順に見つめ少し苦しそうな顔をした後、全てを悟るように、または全てを捨てるように小さく、小さく微笑み言った。

「全部・・・・・・・・・・・・・・・・・・教えてあげる」

離魂 第二話「Farewell, A World Of One's Own」

第二話「Farewell, A World Of One's Own」

人は誰でも心に闇を飼っている。

その強さ、大きさはどうであれ。

人は弱い生き物、なのだから。

希望、可能、無限、あらゆる【正の言葉】は神が作った。

絶望、不可能、有限、そんな【負の言葉】は人間が作った。

もしも、今自分達が住んでいるこの世界のあらゆる闇の部分を書いた本があり、それを読んではまったとしたら、あなたはどうしますか？

光と闇は決して一対一の関係ではなく、光の何倍もの闇がこの世界には存在すると知ったら。

人間の負の感情が今までの歴史の中でどれだけの闇を生んだのかを知ったとしたら。

信じられるのは所詮、自分だけだと気付かされたら。

あなたは、それでも歩き続ける事が出来ますか？

読んでしまった。

読んではいけなかった。

もう、耐えられない。

僕一人ではもう、抱えきれない。

でも、僕は誰も信用できない。

きつと誰もが僕を陥れようとしている。その隙を狙っている。やられる。墮とされる。

だったら、やられる前にやっつけてしまえば。そんなことは出来ない。僕には。出来ない。出来っこない。

じゃあ、【僕】じゃなかったら？ 【僕】じゃない【僕】がいてくれたらやれる？ ううん、きつと新しい【僕】なら闇に勝てるかもしれない。どんな闇にだって。

他人は信じられない。

でも、自分自身なら信じられる。

新しい【僕】を創ろう。僕なら出来る。僕のこの力を使えば。オリジナルは消して、まったく違う僕を創るんだ。

そう、新しい【村雨 明日香】を

十二年前。村雨明日香三歳。

六月三十日の午後。

一組の子供連れが本屋に立ち寄った。

背の高い紳士風の父親と子供がいるのか大きなお腹を抱えた母親。そして、しっかりしていそうな姉に人見知りが出ている弟という構成だ。

四人は少し古めの本屋さんへ入って行った。

その本屋さんには村雨家が昔から利用している昔からある本屋さん。その外見と似つかず大抵の本は揃っている。

「お姉ちゃんも明日香も好きな本買っていいわよ」

優しく母親が微笑みつつ娘と息子に言った。

『お姉ちゃん』は目を輝かせながら本の並ぶ棚を駆け巡る。

『明日香』はおどおどしながらも奥の方へと進んで行った。それから数分。

「二人とも決まった？」

母親がそう言うとお姉ちゃんは可愛らしい花柄が表紙になっている本を。そして明日香は題名も書いていない黒いハードカバーの本を持つ

てきた。

父親がその二冊の本をレジへ持って行き、会計をしていた。

「ふふふふ」

急に店員（年をとったお爺さん）が笑う。

「いいものを見つけたね坊や。これはタダにしておくよ」

明日香が見つけた黒い本はタダになった。

「いいんですか？」

父親が問う。

「いいんだよ、いいんだよ」

そう言ってお爺さんは二冊の本を父親に手渡した。

「あ、あ………ありがとう………」

明日香は小さな声でお礼を言った。

本を買って明日香は人が変わる。

本を買って一週間後、明日香は壊れ始める。

本を買って二週間後、明日香はある人物と出会い、

本を買って三週間後、明日香は現在の【明日香】へと変わる。

七月一日。本を買った翌日。

「明日香、ジューズいる？」

明日香の母親が明日香の部屋へ入り様子を窺った。

「いない」

明日香は小さな声で答えた。

初夏の日差しが当たらない影となった部分に座椅子を置き、それに軽く腰かけた明日香は先日買った黒い本を黙々と読んでいた。昨日からずっと。

「あんまり、無理しちゃ駄目よ」

「うん」

何時もなら甘えん坊である明日香は母親の足音が聞こえるだけで

駆け寄るような子だ。

しかし、今はただその本にだけ視線は注がれている。

七月二日。

朝、昼、晩の食事時にしか明日香は姿を現さなくなった。

黒い本を一日中読んでいる。

さすがに明日香の両親は心配になり、その本を取り上げようとしたが明日香が愚図り離そうとしなかった。その時の明日香の表情は本気だったという。

七月三日。

「明日香、面白いその本？」

明日香の母親が明日香に話しかける。

明日香は既に喋ることもしなくなりただ頷くだけだった。

「お母さんにも・・・・・・・・・・読ませてくれない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

明日香は何も答えず、首を横に振った。

七月四日。

その日、明日香から妖気のような物が溢れ出ていた。

それが実際に出ていたかは分からない。

ただ、明日香の家族には明日香から湧き出る黒い煙が人型に見えた。

それは、嘲笑う【道化師】のようだったという。

七月五日。

明日香の両親は明日香を病院へと連れて行った。

月影総合病院精神科。

明日香は三時間、そこでテストや診療を受けた。

しかし、そこに医学及び科学の入る隙間は無く、『詳細な病名は

不明。鬱の可能性有り』とされ明日香は病院を後にした。

それから両親は本を買った店に行き、あのお爺さんに本について詳しく聞きたいと言った。

そのお爺さんによれば

お爺さんが二十代半ばだった頃、この書店を開業。世界中から集められた原書が集められていると話題となり中々繁盛していた。

そんなある日、一人の商人が本を売りたいと言ってきたという。

その本はドイツ語に似た、されど所々古代文字が使われており翻訳は不可能だと言われる黒い本だった。

当時、かなりの蒐書者^{ビリオマニア}だったというお爺さんはその本をすぐさま言い値である一万円で買い取った。

お爺さんも何年もかけてその本の翻訳を志したが不可能だったという。

それから何十年も経ち、そんな本のことなど忘れていたころ明日香がその本を買ったのだと言う。

「なぜそんなことを聞く？」

と言うお爺さんに両親は答えることが出来なかった。

七月六日。

明日香の両親は有名な霊媒師の所へ来ていた。

明日香の様子を霊媒師に見せると、門下の者を大勢連れだし明日香を訪ねてきた。

それから数時間かけてお被いのようなものを試したが次々に門下の者が倒れ、最終的にその霊媒師も諦めた。

倒れた理由がその本の持つ力によるものかどうかは分からない。両親は泣く泣く明日香を連れて帰った。

二人の頭の中には既に策は残されていなかった。

七月七日。本を買って一週間。？0

その日、明日香は何事もなかったかのように家族と接し始めた。

両親は明日香にその理由を聞くと、

「本を読んでしまったんだ。あれっ、僕ってここ一週間家から出てないかも。えへへ」

と答えた。

その日から明日香は以前より明るく、また人見知りも少し治っていた。

好き嫌いも無くなり、出来すぎた変化が明日香に起きている。

両親は複雑な心境を抱えながらも、そんな明日香を微笑みながら見つめていた。

その夜。

明日香は一人、真つ暗な自室で何かをしていた。

明日香の姉が明日香の部屋から漏れる影を見つめる。

そして呟いた。

「お客さん？」

それを聞いた明日香の父親は明日香の部屋へと飛び込む。

月明かりに照らされた部屋に広がっていた光景。

それは

「なんだ、これ………なんだ………」

この【影】は！？」

明日香を取り囲むように数人の人影が立っていた。

影を創りだすべき本体は存在しておらず、ただ影だけが意思を持つかのように動いていた。

その一つ一つの影の形は異なっている。

小さな子供、薄い着物を着た女性、背の高い男性、何人もの人が存在していた。

「明日香！」

父親は明日香を抱きかかえた。

一切動じる事のない明日香を振るえる父親が抱きかかえている。

それから、父親はどうしたか覚えていないと言う。

明日香も何も語ろうとはしなかった。

ただ、

「Singt der Mond?

月は歌いますか?

と小さな声で呟いた。

七月八日。??

昨夜の件は明日香とその父親が二人とも気を失ったことで終わりを告げた。

明日香はその日、何時も異常に『普通』の生活を送っていた。強いて言うならば普段より少し甘えているくらいだった。暫くぶりの平穩。

村雨家を包んでいたのはそんな空気だった。

七月九日。??

その日の明日香は大人しかった。

何を言っても返事は短かった（しかし、応答は理にかなっていた）。

目を閉じ精神統一でもするかのように一日中、部屋で正座をしていた。

「『私』はなぜ生まれたのか？」

家族のいない部屋で一人、明日香は呟いていた。

七月十日。??

「昨日はご心配をおかけして申し訳ございませんでした。あれ、少し違いますか？」

それがこの日の明日香の第一声であった。

家族は目を丸くし明日香を見つめる。

明日香はそれを見て、顔を赤くしつつオロオロしていた。

「えっと、えっと、間違えてますか？」

その日、家族は明日香をもう一度病院に連れて行くことを決めた。

七月十一日。??

明日香の両親は明日香を朝一番で病院へ連れて行こうとした。しかし、

「大丈夫。僕はもう平気だよ。心配しないで?」

と、今までの変化を感じさせない屈託のない笑顔で明日香が両親を見つめた。

「もう、病院は必要ない。僕は僕だから」

一見心配などするだけ無駄なように見えるその表情も、二人の親には何処か不自然に見えた。

七月十二日。??

「少し出かけてくる」

開口一番、明日香は家族にそう伝え両親の心配を他所に外出した。今までの変化に二人とも気付くのに数分かったが、明日香はまだ三歳である。

一人で出歩ける歳ではない。

また、今までの口ぶりも明らかに三歳児に話すことのできる内容ではない。

父親はすぐに、明日香を捕まえ抵抗するのを押さえながら病院へ連れて行った。

月影総合病院精神科レッドエリア。

そこは危険度が高いと見なされた患者を保護し、治療を行う施設。明日香はそこへ連れて行かれ、以前より多くのテスト、世界中から集められた学者によるセラピーを受けた。

明日香は最初はちゃんと答えていたものの、途中から飽きたのか何も話さなくなった。

そこで、ある一人の学者が催眠術を使いたいと提案した。

両親は反対したが明日香の容体を説明され了承をせざるを得なくなった。

催眠術をかけるのは意外と簡単で、明日香は数分で倒れ込み寝息の様なものをたてはじめた。

そこから、恐怖の始まりだった。

七月十三日。？ 0 ？ ？

日付が変わり、深夜遅くに催眠療法が始まった。

専門家の先生は明日香を軽くマッサージしながら言葉をかける。

明日香はその言葉を聞きながらウトウトとし始めた。

それから二時間後、明日香は布団の上に倒れ込んだ。

？

僕は今、何処にいるんだろう？

濃い霧が僕を包んでいる。少し肌寒いし。体も重い。

病院に……。いなかっただけ？

そつえば聞いたことがある。これは明晰夢だ。

夢の中で夢だと自覚することが出来る現象。

うえっ！ 誰がいる？

一人のコート姿の男が僕に近寄ってくる。

「だ、誰！？」

男はうつすら笑い、突然話し始めた。

「知っているかい少年？ この世界には光と闇は一对一に存在しているわけではない。じゃあ、どちらが先に生まれたのか。無論、【闇】だ。世界の本質とも言えるこの宇宙に最初に生まれたのは闇。宇宙は恐れた。闇に埋もれた自らを。だから生んだのさ【光】を。夢や希望と呼ばれる明日へと向かうための光。宇宙に輝く星々はそうやって生まれた。そこで、どうだい？ 一度この世界の【全ての闇】を見てみないかい？ そつすれば今以上に素晴らしい輝きを持った【光】が君の中に生まれると思うが」

男の人はそんなことを言った。

「君は読んだ筈だ。あの本を！ あの本に書かれているのは人間の生んだ闇だ。それを読んで君はどう思った？」

どうと言われても分からない。

何故読めたのかも分からないのに。

でも、一つだけ挙げるとしたらこの世界の闇は醜いということかな。

美しい闇だって中にはあるだろうと僕は思う。

でも、そんな闇はなかった。

それは存在しないってこと？

わからない。

僕にはわからない。

「フッフ 闇を共に見つめないか？」

そうだね、僕は、あなたと、闇を

「言ったな！ ハハハッハハハッハハハハハハハハハハハッハ」

その男は奇声を上げて僕の頭を鷲掴みにした。

そして。

僕の頭の中に闇が流れ込んできた。

ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

？

緑色の煙が室内を埋め尽くしている。

甘ったるい香りと静かに揺れる炎。

ここは催眠術を行うための部屋。

催眠術を行うのは中年の男。おそらく、その手のプロだろう。

その男は異様な空間と化したその一室で明日香の精神内へと侵入を試みた。

しかし、そのビジョンが見えそうになった瞬間、

「！」

男は驚きのあまり仰け反った。

見る見るうちに狂つたような笑みを浮かべ、また髪の色が黒から白へと変色した明日香が立ちあがる。

男が叫んだ時、明日香は、

三歳児の力とは思えない圧力が彼の顔面を襲い、

言葉にならない声を男が上げた瞬間、明日香は元々見開かれた目をさらに見開いた。

狂氣的な目で明日香は扉を見つめる。

その時、施設内ではけたたましくサイレンが鳴り響いていた。

明日香は真つ直ぐ出口へと向かっていた……。

それは男のやられ方が尋常ではなく明日香がR型であることが原因だった。

それから数分後、明日香はゆっくりと歩きながら現れた。

如何にも力自慢な男が三人、明日香の前に立ちふさがった。

その男達は両手を広げ通せんぼをする。
しかし。

「な………に!?!」

明日香は立ち止まらずいつの間にかその男達の『背後』にいた。
明日香は振り返った男達に、

「邪魔スナナ」

そう言い、右手を向ける。

その瞬間、その男達の腹が大きく凹み後ろへと吹き飛ばされた。
そんな様子を見た、武装した男二人が駆けてくる。

二人は機関銃のようなものを構え、

「と、止まれ。R型の人間は危険とされれば殺してもいいんだぞ!」
と脅しをかけるが笑う明日香に対し兵士の方が脅えている。

尚も明日香は歩み続けた。その表情は三歳の子供に見られる愛らしさは見受けられず、狂った顔に作られた人形の様な雰囲気がある。
「撃つなら撃てよ」

明日香は男達に向け挑発的に語りかけた。男達は恐怖で顔を引きつかせている。

実際、発見されて間もないR型の人間に危険とされた者はおらず、当然発砲してもよいなどというきまりはない。男達の挑発は全く明日香に効いていなかった。

しかし、男達は明日香のその狂氣的な笑みに身の危険を感じ、ついに、

パアアアアン

銃声が病院の白い廊下に響いた。

しかし、その行動は逆に男達を恐怖に陥れた。

発射された弾丸は明日香の顔のすぐ目の前で『回転していた』。

明日香の頭を貫くことなく何かの壁に当たっているかのようにただその場で回転し続けている。

男達は驚愕に顔を引きつらせた。

明日香はそれを見て、

「ドケ」

笑いながらそう言った。

その瞬間、二人は左右に吹き飛ばされ壁にめり込む。

明日香は飄々と歩み出した。

出口まで百メートル、明日香は余裕の笑みを浮かべ突き進む。

そこに小学生低学年くらいの少年が立ちふさがり、

「知っているか？ R型の血は濃ければ濃いほど能力の力を増す。

で、俺は今世紀稀に見る濃い血の持ち主なんだ」

大人のように語るその少年はR型が見つかり、その血が超能力を生みだすことが発見された時、数多くの実験に協力させられた子供だった。そのせいで明らかに子供らしさが欠如し、既に大人の様な雰囲気醸し出している。

その少年は明日香を見下しながら、

「俺の能力は真空^{セロ}。さて、遺言を聞いてやろうか？」

少年は手に持っていたペットボトルに力を込める。

すると、それは破裂しさらに中に入っていた水は玉になって空中を浮遊している。

明日香はそんな少年を見上げながら口が裂けんばかりに笑みを浮かべ、

「遺言を聞いてやろうか！」

と挑発的に顔を歪めた。

「チッ、頭に乗るな、我鬼！」

少年は手を前に突き出す。

しかし、なにもおきない。

「なんだ………」

少年は半ば放心状態になる。

そんな少年に明日香は同じように手を向け、

「ドケ」

と言った瞬間少年は自らの首を掴み、顔を苦しみの色に変え、倒れ込む。

呼吸の出来なくなった少年は地面をのた打ち回る。
十秒ほどでそれは解けたが少年はそのまま動かなくなった。

それから明日香は数十メートルおきに置かれた兵士たちを次々に
戦闘不能に陥れていった。

明日香が出口まであと少しの所へ来た時、
「止まれ！」

例の如く数人の男たちが明日香の前に立ちふさがった。

男達は明日香を眼中に収めるとすぐさま手に持っていた手榴弾の
栓を抜き明日香に投げつけた。

白い煙が次々に噴射される。いつの間にか彼らはガスマスクを着
けていた。この煙は睡眠ガスで明日香を眠らせる……………
・はずだったが。

煙は徐々に左右に寄って行く。正確に言えば明日香を避けていた。
明日香が男達に近づくとその場所に漂っていた煙は道を開けるよう
に壁際へ寄った。

「！？」

「ドケ」

明日香の声が病院に響く。次の瞬間には男達は、半分は天井に、
半分は地面に埋め込まれていた。

明日香は出口の扉に手をかける。

その時

「待ちなさい！」

明日香を呼び止める少女の声がした。

明日香は振り返る。そこに立っていたのは、

「逃がさないわよ！」

立っていたのは明日香と同じ三歳くらいの少女だった。

「似合わない口調だな。お前も俺と同じ類か？」

少女はしかめっ面になり叫ぶ。

「一緒にしないで。私はこれの力を借りているだけ！」

そう言って少女は何時の間に出したのか自分の身長より長い日本刀を抜く。その刃は蒼く輝いている。

「チッ、さすがの俺にもわかる。そいつを持っていたから俺に気軽に話しかけられたって訳か」

明日香はその剣を見つめながら不機嫌そうに呟く。

少女は明日香に近づき日本刀を明日香の首筋にあて、

「なんで、こんなひどいことが出来るの？」

と、今にも泣き出しそうなのを堪えるような表情して明日香に訊いた。

「酷い……か。フン、もう治つてると思うがな」

「え？」

「知っているか？ 完全治癒を使っただよ」

少女は驚愕のあまり何度も明日香と病院を交互に見た。

それからまた明日香に向き直り、

「あなたの能力は完全治癒メディカルではないはず。だって、それにはあんな風に敵と戦える力はない筈だもん。でも、どうして!？」

少女は明日香に詰め寄った。今にも日本刀が明日香にあたりそうだが両者氣にした様子はなく、ただ淡々と明日香は答える。

「確かに俺の能力じゃないかもな。でも、それは使えない理由にはならないんだよ」

明日香はそれだけ言い残すと少女を置いて歩き出す。

少女は一瞬呆氣にとられたがすぐに我に返り明日香を追った。

「ちよつと待ちなさい！ まだ話しは終わってないの！」

「俺にはすることがある。だから付きまとうな」

「結局あなたの能力はなんなの？ あんなに大人を倒して……
……一体何者!？」

その言葉を聞いた瞬間、明日香は足を止めた。

「俺は……」

明日香は俯き、後ろにいた少女の方に向き直る。

そしてこう言った。
「俺は村雨明日香だ!」

Another World

白く濃い霧が辺り一面に広がっている。

そこに高さがありある黒い西洋風の城がそびえたっていた。

その中には真紅のカーペットが一面に敷き詰められ真ん中に大きな階段、見渡して分かる限りでも十数部屋はある。

一階にある応接間の様な所に暖炉で体を温めながら珈琲を飲んでいる男がいた。

二十歳程の背が高く少し痩せた西洋風の青年。

彼は懐中時計を見つめながら微笑みを浮かべている。

そこに一人の少女が姿を見せた。

十三歳程の上品ながら活発そうな東洋風のセミロングの少女。

彼女は青年に目をやると一言だけぱつりと呟いた。

「見つかったの?」

その声には少しからかう様な雰囲気もある。

「ああ、一応」

その反応に少女は多少驚いたような表情を浮かべたがすぐに元の涼しげな笑顔に戻ると、「出発は明日ね」と呟いて違う部屋へと向かって行った。

青年は一人、銀の輝きを放つ懐中時計を片手に甘い香りを漂わせる珈琲を飲んでいた。

「監視者^{ウォッチャー}と追跡者^{チェイサー}を所定の位置に」

その言葉を言ったのがその青年かどうか、それはわからなかった。

?

明日香は少女と共に村雨邸へと辿り着いていた。

「さて、どうするか」

思案顔をする明日香に少女は尋ねる。

「さっきから何を考えているの？」

明日香は少女の顔を一瞥した後、

「俺が俺でいられる方法、とでも言っておくか」

と独り言のように言い、家の中に入って行った。

少女も明日香の後に家の中に入る。刀を構えながら。

その家の雰囲気はあまり良いものではなかった。

どこか暗闇に墨をぶちまけたようにさらに濃い黒を持つ空間に妙に紅い月の光が差し込み、二階へあがると明日香の部屋と思われる部屋から嫌な気配が漂っていて、また空気が重く逆に霊的な恐怖はないが何とも形容しがたい気持ちになった。

明日香は何の抵抗も無く自室へと入り部屋を見回した。何かを探すように。

明日香は机まで行き、そこに隠すように置かれている一冊の本を握る。それは紛れも無くあの黒い本。

明日香はその本の表紙を指でなぞる。それを三回繰り返すと、一瞬紫色の光を黒い本の表紙が放ち、字が浮かび上がった。

【L i b e r s a c e r】

明日香はその文字を読むと含み笑いをする。

「【聖なる書】か。確かにこいつは【黒書】だしな。にしても【グリモワール】とは頭が下がる」

明日香は一人、そんなことを呟いていた。

「グリモワール？」

少女は少々遠慮気味に明日香に尋ねた。

「グリモワール、所謂【魔術書】だ。これは聖なる書、簡単に言えば降霊術を記した書物だ。こいつは原本ではなく写本だな。しかも書きかえられた写本。名ばかりの聖なる書だ。実質、降臨させるのは靈なんかじゃない。人の世界に墮天した存在。その名は【クラウン】。今で言う【道化師】だ。この本は読んだ者に道化師の力、い

や正確には神としての道化師の力を授けるものだ」

明日香は淡々と少女に語った。当然、少女にはちんぷんかんぷんだった。

「その昔、一人の男が死を目前にした自らの娘のために神になろうと決意した。その男はその力を有したが神々がそれを許さず、もといて恐れ、その男を人が創りし神の業【呪術】で殺そうとした。しかし、その計画は失敗し男によって呪術師は殺された。呪術師の弟子はそれを悲しみ、また現世への再臨を望み、聖なる書で降霊術を考案し、書物を収めた。多くのグリモワールや禁書、幻書、魔導書によってその男は墮天させられた。しかし、その男は娘を救うため人間界の神、道化師となり自らが世界の王を影で支配し、最良の道化師である【フル】の創造に没頭した。実験に使われた人間のほとんどが力を持たぬ道化師である【ピエロ】となったがフルへと変貌した者もいた。そのフル達は神へと宣戦布告したが、勝つことは出来なかった。その男は死に、フルも全滅。男の娘は絶望的だった。だが最後の最後に【クラウン・タイム】という力を持つ者によって世界は改変された。神々は滅んだ。その力によって。クラウン・タイムは男がフル製造の為に書いた書冊に新たな要素を凝縮させ注入、無駄なものを排除し完成したもの。それを誰が創り世界を改変したかは分からないが、今言えるのはこの【聖なる書】こそが【道化師の時の書】という書冊であるということだけだ」

少女は圧倒させられる。三歳児の口からそのような言葉が出れば誰しもが驚くであろう。しかし、それを言うならば少女も同じなのだが。

「えっと、それで？」

「これを壊す」

明日香は淡々と告げた。

明日香は外に出た。

本を片手に。

少女はその後を追う。

「これ以上、増やしてはいけない。俺で終わらせる。クラウン・タムは俺が背負う」

明日香は何度もその言葉を繰り返していた。

「名も分からぬ者、明日は葉を散らし真を探し夢を見つけて都を築き香りを想うもの」

明日香は呪文のように呟いた。すると本は眩く輝きだす。

「我に汝の想いを聞かせよ。そして白銀の十字架を我に向けその力を解放し無念を晴らせよ。聖なる刃は憎き敵に、聖なる盾は愛する者に、聖なる力は我に、運命を定めし羅針盤に汝と共に名を刻ませよ
クラウン・タム

パアン

全ての呪文を唱える前に銃声が響き渡った。

明日香の足元で着弾した弾から白い煙が上がり明日香の顔を撫でる。

「そこまでだ、坊や」

そう言ったのは身長が二メートル近くある剛腕そうな男だった。

「その本を渡せ。渡すのであれば殺すだけにしておいてやる」

不敵な笑みを浮かべ二人の子供を見下ろす男。

明日香はその男を見て、

「ケツ、また一から唱え直しか、クソッ、何処にでもいそうなというか多々のドラマやアニメにしょっちゅう出てきそうな木偶の坊巨大男かつこウドの大木かつことじが俺の邪魔をするとは本当に世の中腐っているな」

その場の空気が凍りついた。

多少脅えていた少女はもちろん男も少し怯んでいる。というより引いている。

明日香は男を見上げ一言。

「じゃあ、とつととやるか。土塊！」

？

めんどくせえ。

変な奴に絡まれたな、まったく。どうしようもない程見かけだけキヤラ臭をプンプンさせた野郎だな。チッ。

まあ何にしてもさつさと本物の土塊にすればいいことが。そして、後ろでチョコマカしている女もどうかしなきゃな。

あの刀さえなければとっとオサラバしているんだが。どうにも分が悪い。

俺は心の中で悪態をつきながら古い工事現場（いかにも廃墟）に着き、男と向き合った。

「で、遺言書は書かなくていいのかミジンコ」

俺は男に暴言（とは思わないが世間一般の常識的にそうだよな）を吐き右足を一步前に出す。

「ミジンコなあ？ 貴様に言われたくはないわ！」

背ではな。俺は力量差を言ったただけだ。と説明するのも面倒臭い。

「じゃあ、やるか。埃！」

「せめて固定しやがれ！」

それがたぶん開戦の合図だ。

俺は男の懷に飛び込んだ。距離は二、三十メートルあったが零コンマ何秒かでもぐりこんだ。

男の顔が歪む。当然だ、俺の拳が二、三発は既に男の腹にきまつている。

それから俺は男が声を出す前に少し距離をとり、右手を前に突き出す。すると男の腹は大きく凹み五十メートル程先の砂山に突っ込む。

俺は左手を突き出した後元に戻すと男は勢いよく俺の方に飛んてくる。それに俺は右手で顔面を殴ると風車のように男は頭を軸に回り盛大に地面に倒れ込む。

そのボロボロの男に右手を向けるとドオンという音と共に地面に

明日香は一転笑みを押し殺すかのような表情で少女に迫る。

「くっ！」

少女は両手を握りしめ、何処からともなく日本刀を取り出した。そしてそれを明日香に向ける。蒼い刃が暗い廃墟で輝きを増していた。

「逃げると言ったら？」

明日香が少女に聞いた。

それに対して少女は「逃げられない」とだけ返した。涙の溜まった瞳で明日香を見つめて。

嫌な沈黙が場を包んだ。重い闇が支配する世界で二人の子供が佇み、方や日本刀を少年の首元にあて、方やそれを面白そうに笑いながら見つめている。

明日香はただ少女を見つめ試すように笑みを浮かべる。面白そうに楽しそうに、そして悟ったように。髪の色と正反対の黒い瞳が幾重にも連なり、異なる瞳があるかのように光った。

「ふっ」

明日香はそう言うその後ろに向かって勢いよく飛んだ。

少女はそれを見て蒼い日本刀を振るう。その剣からは蒼い波動が明日香に向かって飛んで行く。

明日香はそれを避け、その波動は砂山に衝突、砂山を撃破する。

明日香は右へ左へ飛び回る。それを追って少女は剣を振るい波動が明日香を襲う。

それを繰り返していると明日香の動きに規則性があることがわかった。少女は次に明日香が飛ぶであろう方向に先んじて剣を振るい波動を飛ばした。

案の定明日香はその方向へ飛ぶ。しかし、明日香は背中中に手をやると一冊の本を取り出した。

それはあの【道化師の時の書】であった。

明日香はそれを波動へと投げる。蒼い波動は黒い魔導書に当たり宙に浮いたまま強烈な光を発した。

くそつ、思つたより速い。家を出るか。

俺は窓を開ける。すると外にキョトンと俺の方を見る蒼い刀を持った女が……

「なっ!？」

あいつは外にいる。じゃあ後ろに迫っている足音は。

「誰だ!」

俺は右手をドアに向ける。すると勢いよく開き、ドアの前に立っていたのは

?

ダアアアン とドアが開き壁に当たる音が家中を包んだ。

明日香は今まで見せたことのない焦りを隠しきれていない顔をしている。

明日香と対峙する二つの人影。

一つは背の高い男。もう一つは中学生くらいの背の女。

月明かりで二人の顔が露わになって行く。男は西洋、女は東洋人のようだ。

「何者だ、貴様ら。俺は今命がけの鬼ごっこの中で付き合っている暇はないんだが?」

明日香は苛立った声で叫んだ。

二人は何も答えない。

「チツ、ド

」

明日香は最後まで言えなかった。後ろ刀を片手に舞い上がる影が見えたからだ。

少女が二階の高さまで跳び上がり蒼い刀を振るつた。

剣先から放たれる波動は正面を向いた明日香を縦に一刀両断した。明日香は驚愕の顔を少女に向けたまま仰向けに倒れる。そして静かに目を閉じた。

高圧的な吊りあがった目は元に戻り、髪の色も黒になる。

皆が認識する普段の明日香の姿に戻った。

少女は部屋に入り、明日香を見下ろす。二人組は既に姿を消していた。

全てが終わりを迎えたかのような、そんな静けさが世界を覆っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8668x/>

クラウン・タイム！

2012年1月13日20時59分発行